

平成三十年度
名寄市立大学
一般入試 前期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、センター試験受験票、本学受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

停滞した日本社会において、なにかにつけて「リーダーシップ」の重要性が説かれる。社会にせよ、組織にせよ、引つ張っていく人たちの存在は欠かせない。しかし、改めて言うまでもないが、有名な大企業や指導者たちはその他多数の中小企業や労働者に支えられて「成果」を出せるのであり、一部の目立つ人たちだけが経済社会を築き上げてきたわけではない。そして、職に就いている人はもちろんのこと、職からあふれた人も総体としての労働社会を支えている。雇用する側からすれば、後者の人たちのおかげで、柔軟な雇用調整が可能であり、大規模な人員削減により会社の危機が救われることもある。また、雇われる側からすれば、現実問題として職に限りがある以上、誰かは（好条件の）職からあふれざるを得ないが、就職の成否の分かれ目に完全な合理性などはない。今現在働いている人も、職からあふれた人のおかげで（たまたま）自分が働けているという理解もできなくはない。したがって、かりに職を得られていなくても労働社会を支えていることには変わりなく、他者から責められる所以も、自分を責めることもないのである。

ただし、世の中には働く気がない者もいる。そのような人たちは責められてしかるべきなのか。社会の「お荷物」として手厳しく批判されることが多いが、社会は「あそび」があることによって機能するのであり、皆が同じ方向をむいてモーレツに働こうとすれば、会社だけでなく、家庭や地域社会などにも余裕がなくなり、ちょっとしたトラブルや人手不足により各場は機能不全に陥る。また、アニメやテレビゲームを例に出すまでもなく、新しい産業やイノベーションは社会の周辺から生まれ、遊び心から大きな産業に発展することは珍しくない。いわゆる「勤勉さ」を必ずしも美德とは思っていない人たちは、社会を維持させるといふ点で、そして社会を持続的に発展させるといふ点でも、一定数必要なのである。働かずに贅沢を望んだり、反社会的にお金を稼いだりするのであれば異論はあるが、働きたくても働けない人、そして働く気がない人も労働社会にとって欠かせない構成員なのである。

社会に対する「貢献」とは、そしてそれとは反対の概念として位置づけられることが多い「タダ乗り」とは、捉え方次第な面がある。どれほど「貢献」を厳密に評価しようが、評価の恣意性からは逃れられない。また、会社では必死に働いていたとしても、地域社会の振興や家事・子育て・介護には無関心な人もいる。「社会貢献」の活動に力を入れすぎて、学校での勉学をおろそかにしたり、家庭生活がさんざんする人もいる。そのような人たちは一面的な「貢献」をしているにすぎないのである。私たちの生活は、市場原理などの一元的な基準によって評価されるべきものではない。会社で働き、家族との団欒を楽しみ、親しい人との親交を深め、地域社会の活動に参加し、さらには、無為に過ごす時間、を満喫するなど、社会への関わり方は多面的であり、多元的である。文字通り多様な生き方を認めない寛容度の低い社会は文化的な成熟さを欠き、ゆがんだ形で社会を「活性化」させるのだ。

もつとも、このような労働観や労働社会観に対して批判や反論はあるだろう。「優秀な人」が出にくくなり、社会が停滞する。社会保障費がかさみ、社会が立ちゆかなくなる。といったたぐいのものがすぐに思いつく。しかしその心配は今のところ必要ない。なぜなら、本書の読者の中にもいるであろうが、批判の方が圧倒的に多数であるからだ。私は、「優秀な人」たちの活躍の機会を奪いたいわけではない。活躍したい人は存分に活躍すればいい。しかし、その「優秀さ」とは一面的であるにもかかわらず、報酬を独り占めしようとするのを当然視する(させようとする)風潮に疑問を呈しているのだ。もし、他者に比べて「貢献」が大きいにもかかわらず報酬が少ないとして不満を持つのであれば——その認識自体が思い込みのことが多いが——、報酬を増やそうとするのではなく、「負担」を減らすことを考えればいい。社会保障費を心配する人は、そして「怠惰な人たち」を権利ばかり主張して義務を果たしていないと批判する人たちは、働く機会を奪いあう社会ではなく、皆に仕事を「負担させる社会」にすればいい。仕事も報酬も占有しようとしていながら、働けない人を批判するのであれば、矛盾である。もちろん、そのような社会が成り立つためにはいくつかの条件が必要である。負担の偏りや労働の過不足を確認しあう機会を持ち、職場規律を自分たちで再構築することが欠かせない。なによりもまず、誰もが働ける職場環境をつくることが先である。

私たちは、〈働くこと〉に振り回され、互いにいがみあい、疲れ切っている。就職の内定を勝ち取るために競いあい、勤めだしてからは何かに駆り立てられるように働き、「できの悪い」同僚や働いていない人に不満をぶつけ、「社会貢献」をする人はしない人を馬鹿にする。しかしこれからは、一部の人が富を占有し、残りの報酬と仕事を奪いあう社会ではなく、それらを「分かちあう社会」を、本当の意味で多様な働き方を実践できる社会を、そして〈働くこと〉に対するさまざまなスタンスを認め合う社会を、すなわち「成熟した労働社会」を希求すべきである。

(一)私たちはどのように働かされるのか 伊原亮司著 ちぶし書房 二〇一五年より)

問 多様な生き方や働き方を認める社会について、あなたが考えることを八百字以上千字以内で述べな
なご。